

氏 名 工藤 航平

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1367 号

学位授与の日付 平成 22 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 近世地域指導者層と地域文化・教育
－近世地域社会の到達点をめぐって－

論文審査委員 主 査 准教授 岩淵 令治
教授 久留島 浩
教授 青山 宏夫
教授 辻本 雅史 (京都大学)
教授 若尾 政希 (一橋大学)

論文内容の要旨

近年、地域社会の急速な解体とともに、博物館施設における指定管理者制度の導入や学校教育などの問題により、継続的な地域文化の担い手の育成ができなくなることが危惧される。一方で、“地域おこし”として地域独自の食文化の発見・創出や伝統的行事などが注目されている。このような状況において、改めて地域文化とは何か、地域文化の形成過程、地域社会における意義ということを経史的に検証する必要があると考えた。

現代まで連綿・伝統といわれていることの多くは、19世紀、特に近世後期に「再発見」「創作」されたものである。そこで、本論文では、近世期の地域社会における地域文化・教育の再検討とその到達点を明らかにすることを目的とした。

地域社会論に関する研究は、1980年代以降、それまでの豪農論に対して、村役人層の役割を再評価し、地域社会の自律的・自治的側面とそれを可能とした能力の蓄積、下から創り上げられた独自の地域行政機構に歴史的到達点をおくことを軸に行われてきた。この評価は重要だが、地域社会論研究は村役人層や地域社会の政治的・経済的側面を中心に行われ、文化的側面である地域文化研究を積極的に取り入れているとはいえない。一方、地域文化研究は、全国各地の地域文化の発掘と独自性を強調する研究が多く、何かしらの文化活動が行われていれば地域文化が存在したとされ、都市と地域との関係などを踏まえた独自性の評価がなされていない。趣味的・娯楽的要素の強い文芸とそれを媒介にしたネットワーク（点と線）の解明について多くの研究が蓄積されている。また、地域教育史においては、類型（手習塾・郷学など）ごとの個別実証研究の積み重ねが行われており、地域的課題や社会的環境を踏まえた地域社会での位置づけが行われていないことが課題である。

以上のような研究史整理を踏まえ、次の3点を本論文における研究課題とした。i 地域社会が地域住民より信任を得ることができた要素について、資質・文化的側面から解明する。また、ii 地域文化の基盤となる地域観（地域で共有しあう観念）の成立を踏まえ、点と線ではなく、面としての総体的な地域文化・教育の把握を行い、iii それを主導した地域指導者層の視点から社会状況・地域的課題を踏まえた地域文化・教育の解明と近世における到達点を明らかにする。そして、村役人層と地域指導者層との意識差や近代との連続的側面について見ることにした。

地域社会について文化的側面から検討するに際し、アーカイブズ学、地域教育史、地域文化論という分野からアプローチする方法をとった。各々の分野の深化を目指し、その成果を地域社会論において総合化することを意図した。

また、地域文化・教育研究が直面する史料的制約については、手習師匠の墓石である筆子塚等の石造物や、従来は村政・訴訟関係史料として扱われてきた編纂物など、様々な史資料を活用することで、地域文化・教育を面として総体的に把握することができた。

本論文では、都市と地域との関係を地域の主体性に注目して考察するため、政治的・経済的・文化的に江戸の強い影響下にあったとされる江戸周辺地域である武蔵国埼玉郡八条領村々（埼玉県八潮市・越谷市）と同国比企郡川島領村々（同県比企郡川島町）を対象地域として検討を行った。

本論文における主要な研究成果は、①地域指導者層の資質形成と、②近世地域文化・教育の到達点という2点の解明にある。（次ページにつづく）

①地域指導者層の資質形成 兵農分離を基本とする近世社会では村役人層による算筆能力を前提としていたが、近世後期以降、村民から「ケ成出来」ることが求められた。この算筆能力として、日常の地域運営において発揮される村方文書、特にそれを明確な目的意識のもと、一つの体系化した〈知〉としての編纂物に注目した。従来は由緒書や旧記、地誌として家格維持との関係から評価されているものを、それら枠組みを外し、「家」意識を超えて村や地域の権益確保を目的としたものを「村の編纂物」と定義した。過去の記録から地域独自の論理を構成し、支配権力をも相対化して様々な場面において村や地域の権益確保を目指すものである。近世後期以降には“編纂物文化”と呼べるような地域的広がりを見せ、地域指導者層・村役人層の蓄積した文化的力量が地域社会に還元されるとともに、地域住民からの信任・合意形成を成立させるものとなった。また、彼らの資質は、当初は家庭内や手習塾において個別的・私的に行われたが、やがて地域的課題として郷学の設立など公的・組織的に担われたとともに、資質の中身も算筆能力から高度な漢学素養や窮民救恤など総合的な資質が問われたことが明かとなり、彼らが主導した地域社会の文化的側面が、政治的・経済的側面のみならず、重要であったことが解明された。

②近世地域文化の到達点 近世後期以降の地域教育の展開を、地域指導者層の視点から総体的に把握した。川島領の手習師匠の変遷は、〈僧侶→元武士（文化期）→地域指導者層（天保期）→村役人・地域住民（嘉永期）〉となり、嘉永期以降に担い手の拡大が見られた。これは、地域指導者層による文化活動を中心とする地域社会への文化的力量の蓄積とともに、手習塾での教育や日常の地域運営などを通じた地域住民への〈知〉の拡大が大きな要因であった。経営形態や教育内容の多様性も見られ、地域総体として質・量ともに充実した。これにより、個々の手習塾が地域内で相互補完的役割を果すこととなり、地域住民の多様な学習要求に応えることができ、川島領内で初歩的な教育を満たす態勢が整えられた。これは、手習塾の入門圏が錯綜していたことからもあり、地域教育を総体的に把握する必要が改めて示された。その中で、江戸や川越の“私塾”にも匹敵する郷学・河島書堂が創設されたことで、初歩的な手習いから高度な漢学までを、江戸や川越に依存せずに川島領で満たすことができる態勢が整備されたのである。本論文では、このような地域教育のあり方を「地域教育態勢」の確立と呼び、この地域主体で創り上げられた地域教育態勢をもって近世地域教育における到達点と評価した。また、幕末期には桜の植樹と石碑建立や句集編纂など、地域指導者層が中心となって文化的結集点（公共の場、名所）を創設し、文化活動を通じて江戸文人や周辺地域の文人らを取り込んでいった。そして、a 文化的結集点を地域指導者層主体で地域自らが創出し、江戸や周辺地域の人々を取り込みながら展開させたこと、b 地域教育態勢の確立により「地域文化の担い手」の再生産が自地域で可能となったこと、この二点をもって、従来の“独自性”ではなく、より積極的に“地域文化の自立”と評価した。

近代小学校設立に際し、地域指導者層は近世の地域教育態勢を基盤として対応しており、早い段階から地域教育・地域文化を把握していたことが判明した。一方、近世期より地域指導者層と村役人層とで基盤とした地域が異なり、様々な場面で対立することにもなった。

今後の課題として、地域指導者層からの視点で、国民国家形成期における地域統合と近世期に形成された地域文化との関係、20世紀の地域社会の再編期において持ち出される地域文化との関係について一貫して解明していく必要性が挙げられる。(完)

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、近世・近代移行期を含めた19世紀の地域社会における地域指導者層（個別の村の村役人層より選出された組合村の代表者たち）について、彼らの地域運営に関する資質の形成およびその継承の到達点を明らかにしたものである。分析の対象は「江戸・東京周辺地域」であり、とくに武蔵国埼玉郡八条領（現埼玉県八潮市・越谷市）・同比企郡川島領（現埼玉県川越市）の二地域をとりあげて、考察を加えている。内容は、大きくはⅠ地域指導者層の情報の収集と共有による地域〈知〉の形成（1～4章）、Ⅱ地域教育の総体的把握（5・6・8章）、Ⅲ地域指導者層による文化的結集点（名所）の創設（7章）の解明からなる。

Ⅰでは、主に八条領の地域指導者層小澤家を素材として、①地域指導者層の家の蔵書目録の中に土地台帳や過去の訴訟文書などを書写・編纂した「編纂物」が含まれていることを発見し、②こうした「編纂物」が地域運営の責務を担う地域指導者層による情報の収集という行為によって成立した、いわば「村の編纂物」であったこと、③そして「編纂物」が地域指導者層の間で共有され、寺子屋のテキストになることで地域住民の「地域」認識の形成をも促す「地域の記憶装置」という側面をもったことを明らかにした。

Ⅱでは川島領の教育機関（寺子屋・郷学）をとりあげ、①手習師匠の担い手がく僧侶→元武士（文化期）→地域指導者層（天保期）→村役人・地域住民（嘉永期）と拡大して地域内で教育の機会が増え質も向上したこと、②さらに明治初年に地域指導者層の教育機関として江戸や城下町川越の私塾や藩校に匹敵する郷学「河島書堂」が設立され、川島領内でさまざまな階層のひとびとが多様な教育レベルの教育を受けることができる「地域教育態勢」が確立したことを明らかにした。

Ⅲでは四方を河川に囲まれた川島領の生命線である川島堤において、地域指導者層が堤への桜の植樹と石碑建立・句集・歌集・漢詩集編纂を行うことで文化的結集点を作り出し、江戸や周辺の文人を取り込みながら地域文化を展開させたことを明らかにした。そして、Ⅱの「地域教育態勢」とあわせ、江戸からの「地域文化の自立」と評価した。

近世後期の地域社会論は、これまで経済的・政治的な側面からの研究が中心であった。とくに、近年では、中間層（広域的な組合村のリーダー：惣代庄屋、大庄屋など）による地域社会における地域運営の自治的能力が近世の到達点として注目されている。こうした先行研究をふまえ、Ⅰではアーカイブズ学、Ⅱでは教育史、Ⅲでは地域文化史の成果に学びながら、中間層の地域運営の資質形成を文化的、教育的側面から分析した本論文は、地域社会論を新たな視角から大きく前進させるものとして、高く評価できる。

また、本論文は、アーカイブズ学・教育史・地域文化論の進展にも寄与しうると考えられる。アーカイブズ学については、従来の管理・公開や、歴史・地域認識の問題のみならず、「編纂物」の作成過程とともに現実の地域運営や資質形成における機能を明らかにした点が重要である。教育史については、寺子屋の個別の検討ではなく、一定地域の状況と構造（「地域教育態勢」）を明らかにした点で、近年提唱された「地域教育史」を大きく進展させたといえる。さらに、類型論に陥っていた郷学研究を地域の視点から進展させる可能性を孕んでいる。地域文化論については、江戸への従属論でも、また「独自性」の抽出でもない、主体的な選択という視座を提起した。また娯楽的な文化活動が政治的な活動と表裏一体の関係にあるという見解については、地域文化が政治的な活動により直結した側面を提示しており、これについても高く評価できる。

以上の他にも本論文の成果は少なくないが、問題が無いわけではない。著者は本論文で、（次ページにつづく）

①寺子屋や郷学でどのようなテキストが用いられたのかについては、史料にそくして明らかにしているが、肝心のテキストや教授方法そのものの内容についての分析は十分ではない。また、②地域運営の資質形成に漢学が大きな役割を果たしたというが、もう少し具体的に説明する必要がある。③漢学だけでなく、蔵書目録に掲載された多様な「書物」が、地域指導者層の〈知〉の形成にどのように関与したのか、についても言及して欲しかった。さらに本論文では、④地域内における地域指導者層の資質形成に焦点をしばったが、その際、地域指導者層と村役人層・民衆の認識のズレにも留意すべきであった。⑤特定の地域を対象を絞って緻密に検討した点は本論文の魅力であるが、他地域との事例との比較・検討によって本事例の一般化・相対化を図ることも必要であった。

このように、いくつかの問題点が指摘されたが、この点は著者もよく自覚しており、今後の研究のなかで克服されていくものと思われる。

以上、審査員一同は、本論文が当該分野の研究に大きく貢献したと認め、博士(文学)の学位を授与することが適当であると判断した。(完)